

共に伸びる異学年交流

小 網 達 也
上 田 雅 人
宮 本 美 紀

1 聞き合いとテーマとのかかわり

子どもの思考力・判断力・表現力を育成していくために、子ども同士のかかわり合いは欠かせない。それは、子ども同士をかかわらせることによって、子どもが気付かなかったものの見方や考え方に気付かせ、それらを新たなものにしていくことができるからである。さらに、異学年とかかわらせることによって、同学年同士では見られない聞き合いの活動をつくり出すことができる。以下に、異学年交流を取り入れることによって得られるよさを三つ述べる。

一つ目のよさは、上の学年の子どもが、伝える技能を向上させられることである。自分の思いや考えを伝える時に、下の学年の子どもでも理解できるような言葉を選ぶことで、伝える技能が高まっていくと考えている。また、既習をふり返る機会にもなる。上の学年の子どもは、下の学年とかかわることによって、既習の理解が深まり、新しいものの見方や考え方に気付くきっかけになる。

二つ目のよさは、下の学年の子どもが、新しい知識を獲得し、それらがどう生かされるのかを学ぶ機会が得られることである。新しい知識の獲得は子どものものの見方や考え方を深める。上の学年の子どもとかかわることで、下の学年の子どもは、獲得した新しい知識がどのように使われるのかを知ることができる。下の学年の子どももそれらの新しい知識を使うことで、ものの見方や考え方の深まりを実感することができる。

三つ目のよさは、子どもが多様な見方や考え方に触れることが期待できるため、新たな疑問や問題に気付きやすくなることである。上の学年の子どもも下の学年の子どもも、それぞれの学年で身に付けた見方や考え方で、既習や生活経験などから意見や考えをもつ。このような子どもがかかわりをもつことによって、子どもはお互いに気付かなかったことに注意を向けることができる。このかかわりが新しい疑問や問題を見つけるきっかけになる。

異学年による聞き合いの活動を取り入れることで、このような三つのよさが得られると考えられる。しかし、異学年がかかわることで、お互いの生活経験や知識量の差を意識してしまい、お互いの見方や考え方を深めていくことが難しくなってしまうこともあり得る。上の学年の子どもに比べると、下の学年の子どもの生活経験や知識量は少ない。聞き合いの活動には、生活経験や知識量の差を生かしたり、埋めたりしながら、お互いの見方や考え方を深めていく必要がある。子どもそれぞれがもっている生活経験や知識は同じではないため、それらを共有させることで、子どもはお互いに気付くことができなかつた新しいものの見方や考え方で意見や考えをもてるようになったり、これまで抱えていて解決できなかつた疑問点や問題点の解決の糸口が見えたりする。また、どんな生活経験や知識を共有させるかによって、得られるものの見方や考え方は変わるだろう。誰と誰をかかわらせるかも効果的な聞き合いのためには必要になってくる。

以下に、講じる手だてについて述べていく。

2 聞き合いのための手だて

(1) 下の学年を中心にした授業展開

効果的な聞き合い活動で子どもがお互いの見方や考え方を深めるためには、上の学年の子どもも下の学年の子どもも自分の思いや考えを伝え合える関係であることが望ましい。しかし、上の学年の子どもに比べると、下の学年の子どもの生活経験や知識量は少ないために、下の学年の子どもは上の学年の子どもとのかかわりを遠慮してしまうことが考えられる。そこで、下の学年の子どもも学習中にもものの見方や考え方を深められるように、授業展開を工夫していく必要があるだろう。かかわる相手を上の学年に限定し、理解しにくいところや疑問に思っていることなどを明らかにする時間帯を設定したり、下の学年の発表を上学年に聞かせる活動を取り入れたりとすることが考えられる。それによって、お互いの子どもの思いや考えの共通点や相違点、因果関係などが見えてきたり、上の学年の子どもが考えもしなか

った気付きや疑問が生まれたりする。また、下の学年とのかかわりによって、上の学年の子どもは、既習をふり返ることにもなる。新しく気付きを生むことにも繋がり、新たな疑問や問題を見つけることにもなるのである。

(2) ノートやワークシートの活用

異学年のかかわりによって、子どものものの見方や考え方を深めるためには、自分の見方や考え方の変容を実感できていることが必要である。そのためには、自分の思いや考えをノートやワークシートなどに書き留めて、いつでも見返せるように整理しておかなければいけない。子ども自身が書き留められたものを俯瞰することで、自分のものの見方や考え方の特徴が明確になるため、交流した時に、自信をもって自分の思いや考えを伝えられるだろう。また、自分の思いや考えが足跡としてノートやワークシートなどに残っていることによって、ものの見方や考え方を深めるための新たな疑問を見つけたり、新しい気付きを得たりすることもできると考えている。異学年でのかかわりによって、最初の思いや考えに誤りが見つかったり、不明確な点が出たりする。自分の思いや考えがノートやワークシートなどに残っていることで、誤りや不明確な点を正しくしたり、明らかにしたりすることも容易になるだろう。こうして自分の考えや思いを再構築することで、ものの見方や考え方が深まり、子どもの中に新しい気付きが生まれ、ものの見方や考え方をさらに深めていくこともできると考える。

(3) 活用知識の共有とかかわる相手の明確化

共に伸びる異学年交流を考えると、上の学年の子ども、下の学年の子どもともに活用できる知識（以下、活用知識）をもたせることで、その知識を軸とした聞き合いが生まれる。異学年が共通して活用できる知識をもつには、お互いにどのようなかかわりをもたせるかが重要になってくる。例えば、下の学年の子どもが知りたい活用知識を上の子が伝えることで、下の学年の子どもにとっては、これまでの見方や考え方を新しいものにすることができたり、活用知識がどのように使われるのかを知る機会になったりできる。一方上の学年にとっては、既習をふり返ることができたり、下の学年の子どもが出した疑問や問題を、分かりやすく説明することで、新しい気付きを得るきっかけにできたりする。さらに、効果的な聞き合いを創り出すには、かかわる相手も明確にしていく必要がある。お互いの知りたいことや学びたいことから、かかわる相手を決めることで、新しい見方や考え方を得ることができると考えている。かかわる相手を明確にした上で、活用知識を共有し合うことで、お互いの学びは具体的で深いものになり、聞き合いに発展していく活動になると考えている。

3 実践例

(1) 下の学年を中心にした授業展開

① 3・4年複式 理科 単元名「天気のようにと気温」

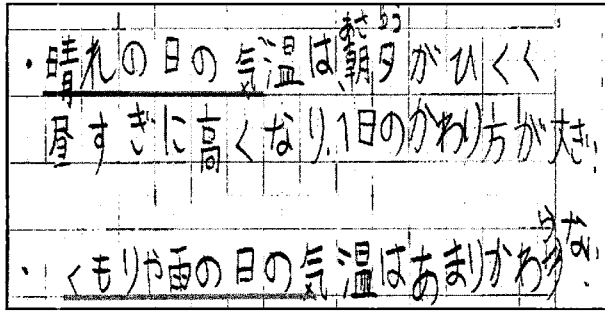
この単元では、天気によって一日の気温の変化の仕方には違いがあることを学習する。違いとは、晴れの日の気温の変化の仕方と曇りや雨の日の気温の変化の仕方を比べると、晴れの日の方が気温の変動が大きいということである。3年生は、今年度初めて理科を学習するため、4年生に比べて、天気の様子と気温の変化を関連付けてとらえることは難しかった。また、4年生との学習経験の差から、理解力にも差が出ていた。それらの差を生かしながら、どうやって3年生と4年生をかかわらせ、聞き合いの活動につなげていけるかを考えて実践した。

学習課題は「観察記録から読み取れることは何か」とした。観察記録は記録温度計でとったものを使用した。この観察記録から分かることを個人で考えさせた

・	最高	気温	29℃	5/7	(火)
・	変化	(一時間ごとの気温)			
・	最低	気温	14.5℃	5/7	(金)
・	一日の気温がバラバラ				
○	必ず一日の中で昼が一番気温(高)				
・	-15℃まで記録温度計ではけられる				
・	+40℃まで				
・	朝は夜より低い 雨→気温下				

資料1 気温の変化について記述した4年生のノート

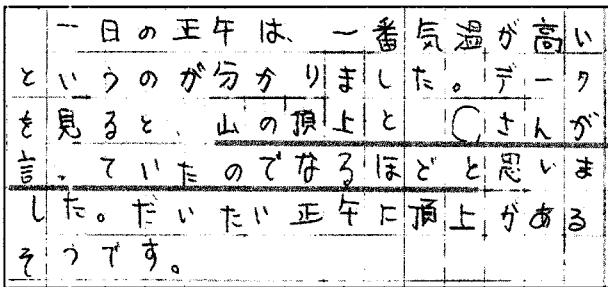
ところ、最高気温や最低気温のことを書いている子どもや気温の変化について書いている



資料2 気温の変化をまとめた3年生D児のノート

ラフについて4年生は昨年度学習しているため、一週間の天気の様子と関連付けて、気温の変化をとらえることはそれほど難しいことではなかった。3年生は、折れ線グラフの学習は初めてであったため、4年生から折れ線グラフの読み方を習ったことによって、3年生は折れ線グラフの書き方や折れ線グラフの読み方を理解していた。授業後の3年生D児のふりかえりの中に、観察記録から天気の様子と気温の変化を関連付けた記述が見られた(資料2)。

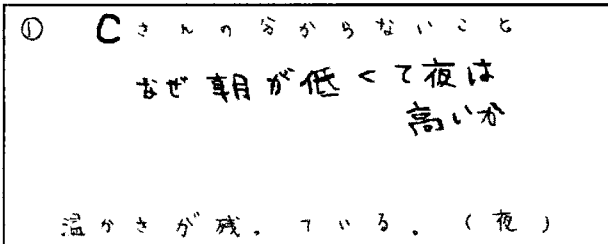
4年生E児は、3年生C児とのかかわりから一日の気温の変化のとらえ方に新たな気付きを得ていた。晴れの日であっても、雨の日であ



資料3 C児と交流し、ふかえりをした4年生E児のノート

っても一日の気温の変化のグラフは正午から14時あたりが一番高くなるような形をとる。交流をした3年生C児が、気温が一番高くなることを「山の頂上」と表現した。4年生E児にとっては、この表現が一日の気温の変化の様子を理解する助けになったと述べている(資料3)。

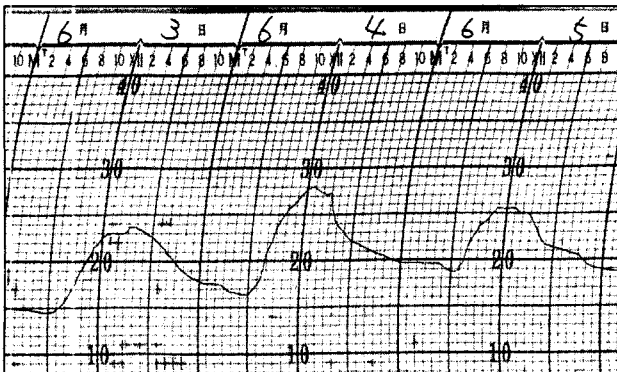
また、この3年生C児と4年生E児とのかかわりが新しい疑問も生んだ。3年生が気温の変化の一番高いところを「山の頂上」として、一番気温が低くなっているところが夜ではなくて、朝であることを不思議に感じたのだ。この疑問は疑問をもった3年生C児のノートだけではなく、4年生E児のノートにも書いてあった。その疑問について、自分なりの考えも述べていた。この二人は、夜と早朝では、太陽が沈んでからの時間の経過が長い方が、気温が下がるという考えを出していた。



資料4 3年生C児から生まれた疑問に、4年生E児もかわって、一緒に考えを記述したノート

つまり、夜は朝方に比べて太陽の温かさが残っているから、気温は朝方に比べて低くなっているということである。3年生にも分かるように、下の方には図も書いてある。このように学年で交流をもつことで、共に伸びていこうとする姿も見られた(資料4)。

下の学年を中心にした授業を展開したことで、3年生が折れ線グラフの読み方を理解できたり、一日の気温の変化を天気の様子と関連付けて考えられるようになったばかりではなく、4年生にとっても、3年生C児が折れ線グラフからとらえた一日の気温の変化の様子から、自分にはない「山の頂上」という表現から一日の気温の変化の見方や考え方を深めることができた。



資料5 授業で使用した観察記録

また、「山の頂上」という3年生C児のとらえから、子どもは「山の裾野」にあたる時間帯を考えた。観察記録を見ると、朝方と晩に一日の間で気温が低くなる時間帯であることを探し出した。すると、新しい疑問点が生まれた。一日の最低気温は生活経験から夜だと思っていた

のだが、朝の方が低かったことをグラフから読み取った。「最低気温が夜より朝の方が低いのはなぜか。」という新たな疑問が生まれた（資料5）。

② 3年・4年 社会科 単元名「わたしの住むまち どんなまち」

3年生は、自分が住んでいる金沢市の様子について調べ、町の特徴や町に住む人々の思いについて考えた。そして、3年生は金沢市見学をして分かったことや考えたことを4年生に伝える活動を通して、市全体の様子をとらえていく。一方、説明を聞いた4年生は、3年生が見学してきた発表を聞くことで、3年生がとらえていた金沢市全体の様子を見直し、石川県の様子へと視点を広げていくことをねらっている。4年生は、3年生が見てきた金沢市の様子を、自分たちが見てきた金沢市の様子と重ね合わせて考えることで、金沢市についての知識のみならず、自分がこれまでに身に付けた見方や考え方を見直すこともできる。

授業の中心は、3年生が金沢市の見学をして分かったことや考えたことを発表することであった。4年生に自分たちが調べたことを伝えよう

と、3年生は発表の仕方をいろいろと工夫していた。そして、4年生は、3年生の説明を聞いて、わかりにくかったところを3年生に聞き返した。3年生は4年生が感じた不明だった点や疑問に感じたこと、もっと詳しく知りたいことなどを聞きながら、自分の発表の不十分なところを補っていた。例えば、4年生が「市民にとって大事な建物が街の中心にあるのはどうしてだろう。」と3年生に問うたことで、3年生は「街の中心に大事な建物が集まっている。」という金沢市の中心部の様子は、4年生に伝わったことを確認することができた。しかし、新たに4年生が「どうして」と疑問を出したことが、3年生の金沢市の中心部の様子のとらえに新たな気付きを捉える機会となった。4年生は3年生が金沢市の様子についての見方や考え方を深められるように「どうして」と問うてかかわったことで、3年生は金沢市の中心部の様子をさらに深く理解することができたのである。

一方4年生K児も、3年生と交流したことで、ふりかえりの中に、金沢市の中心部の様子について新しい気付きがあったことが書かれてあった。武家屋敷の構造から、昔の人のくらしぶりを見ていきたいとふりかえりをしていた4年生がいた（資料6）。4年生にとって、この交流が金沢市に対する見方や考え方を見直すきっかけになっていたことがわかった。また、4年生K児は、3年生の調べてきたこと（武家屋敷について）の発表を聞いたことで、金沢市の伝統文化のよさを実感していた。これが、今後の石川県の様子に視点が広がっていくとも考えられる。

(2) ノートやワークシートの活用

授業では、見方や考え方を共有するために、ノートやワークシートに思いや考えを書きとめることを具体的な手だてとして実践した。その手だての一つ目はキーワードを使ってメモをとり、自分の考えを文章で書いていくことであり、二つ目はワークシートを拡大したもの（板書用）と縮小したもの（子ども用）を用意することである。

これらの二つの手だてのために、まず子どもが各自で考えてきたことを発表し合う場を設定した。文章でメモをとると、説明する子どもが発する言葉を一字一句もらさないように聞いてしまう可能性がある。そこで、キーワードを用いて、メモをとらせ、自分の言葉で思いや考えを組み立てることで、自分の見方や考え方を再構築できるような聞き合いをすることができると考える。また、自分の見方や考え方を深められるような聞き合い活動には、視覚から入ってくる情報をもとにして子どもの思いや考えを交流させることも必要であると考えられるため、子どもに配布するワークシートと同じものを板書に示す。板書には、子どもの思い

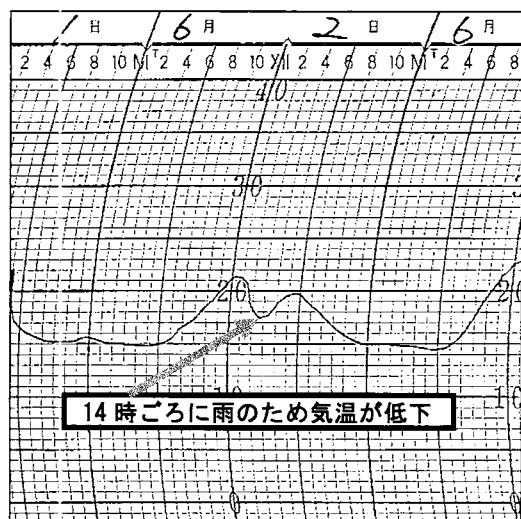
三年生の説明を聞いて、うけ家しきには一階と二階があって、これは、野村さんが建てたようです。
一階は、茶室になっていて昔の人はここでお茶をのんでいたそうです。そして、金ばくや丸谷や物置は二階にあるそうです。
又、金沢市に記念館は古く天正七年につくられた築屋さんの店先をさしげんげ建物たそうです。
金沢には、た山の伝の文化があります。
ほくぞひ見学に、いて昔の人のくらしぶりを見てみたいと思いました。

資料6 4年生K児のふりかえりのノート

や考えが絵や図，キーワードを入れながら，効果的に書きまとめられている。したがって，自分の思いや考えを構築するために必要な情報を視覚から得ることが容易になり，自分の見方や考え方を深めることになる。また，子どもにとって，ノートやワークシートから分かったことを手がかりに自分の考えを述べていくことは，新たな気づきを促したり，新たな疑問や問題を生んだりすることにも繋がると考えられる。

① 3・4年複式 理科 単元名「天気のようにすと気温」

この単元では，天気によって一日の気温の変化の仕方には違いがあることを学習する。4年生は「晴れの日には気温が高い」や「雨の日には気温が低い」という見方や考え方は身につけていた。そこで，気温は常に一定しておらず，一日の間にも変化していることを理解するためには，子どもが体験を通して，一日の気温の変化を実感している必要がある。

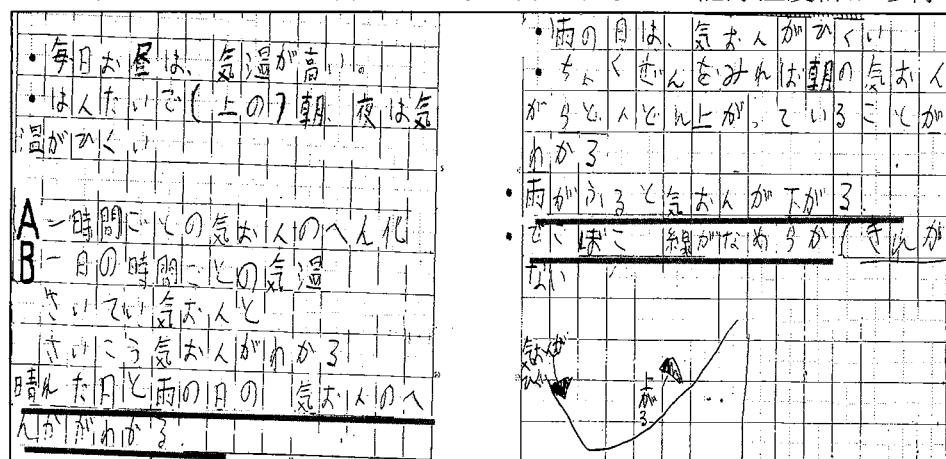


資料8 運動会の日記録温度計データ

6月2日に行われた運動会の日14時近くに雨が降ったため，それまで晴れて暑かったのだが，急に気温が下がり肌寒くなった。この運動会の日気温の変化を記録温度計で記録したデータを板書用と子ども用を準備し，天気の変化による一日の気温の変化を考えた。(資料8)。

観察記録をもとにして異学年をかかわらせても，子ども自身の思いや考えがあいまいなままでは，自分の見方や考え方を明らかにしていくことは，難しいことである。そこで，子ども用に配布した観察記録をノートに貼らせた。一斉授業では，子どもから出た考えは板書用に記入し，子どもは必要に応じて，自分の観察記録にも友達の思いや考えを記入していた。子どもは記入されたことを見ながら，自分の観察記録に気付いたことや考えたことを書いていた。3年生の多くは，板書用の観察記録に書き込まれたことをそのまま書いていたのだが，板書用と友達の観察記録を見合いながら，自分の観察記録に自分の考えや気づきを書いている3年生もいた(資料9)。この3年生F児のノートから6月1日から6月7日までの記録温度計から得られたデータを見ると，この3年生F児も含めて，

昼近くに気温が一番高くなっていることをつかんでいた。一方で，朝方や夕方は気温が低くなっていることもつかんでいた。しかし，天気の様子と関連付けて，一日の気温の変化をとらえることは難しかった。一方で，4年生には天気の様子を気温の変化と関連付けてとらえることができている子ども



資料9 3年生F児のノート

が多かった。

そこで，3年生F児を4年生A児，B児，G児と交流させることで，3年生F児にも天気の様子と関連付けて気温の変化を考えられるようにした。このノートを書いた3年生F児は4年生A児，B児と交流することで，折れ線グラフの読み方を学んだ。3年生は折れ線グラフの読み方を知ったので，一時間毎の気温の変化が分かることをつかむことができ，晴れた日と雨の日の気温の変化の仕方の違いを理解していた。「でこぼこ」している折れ線グラフの概形は晴れに日に多い形であること。また「線がなめらか」な折れ線グラフの概

形は曇りの日や雨の日が多い形であること。このように表現していることから、聞き合いの活動によって、天気の様子による一日の気温の変化を3年生が理解していたことが分かる。また、ふりかえりの中でも、4年生A児、B児と聞き合いの活動をしたことで、天気の様子と関連付けて気温の変化をとらえられたことがわかる。「雨がふっている時」や「晴れの時は」という言葉を付けていることから明らかである。また、「4年生と意見を交流した時、自分が気付かないことをみんながいっぱいもっていたので、びっくりしました。」と述べていることから、4年生A児やB児と交流をもったことが、3年生F児が天気の様子と気温の変化を関連付けて考えられるようになったと考えられる。さらに、4年生と交流することができたことで、今後の学習に対して意欲をもてたのではないかと考えている（資料10）。

ふり	返り			
雨	が	ふ	っ	て
時	は	。	気	ま
は	く	く	て	。
の	時	は	。	気
				ま
				ん

が	ふ	い	そ	し	て	。	4	年	生	と	意	見	を	こ
う	り	っ	た	時	。	ほ	く	が	き	づ	か	な		
い	事	を	み	ん	な	が	い	。	ほ	い	も	っ	て	い
た	の	ふ	ひ	。	く	り	し	ま	し	た	。			

資料10 授業後の3年生F児のノート

また、4年生G児にとっても、一週間分の観察記録を俯瞰し、3年生と交流したことで、新しい発見があった。3年生C児が一日の気温が一番高くなる場所を「山の頂上」と表現したことによって、G児がこれまで自分が気付かなかった一日の気温の変化をとらえることができていた。3年生C児とかかわることで、天気の様子による気温の変化の見方が新しいもの変わったと言える。また、気温の変化を「いろいろな高さの山」であると表現していたことから、気温の変化に関する自分の理解も深めることができたと考えている（資料11）。「いろいろな高さの山」にはいろいろな高さの頂上もあれば、いろいろな深さの谷もある。それらの部分を天気と関連付けると、頂上は気温が一番高いところ、谷は気温が一番低いところと判断すると、頂上や谷がいろいろあるということは、気温の変化は日によって違うことが考えられる。したがって、日によって天気も少しずつ異なっていることも予想することができる。気温の変化の様子をとらえていた。「山の頂上」という表現は、一日の気温の変化を理解する上で、大変有効なものだったことがわかる。自分が理解を深められる見方を得られたという点で、新たな気づきが生まれた。

ふり	返り				
正	午	か	。	山	の
と	か	り	。	だ	ん
こ	と	や	。	谷	は
に	お	ん	か	。	あ
ふ	っ	た	ら	そ	の
下	か	り	。	谷	に
温	に	あ	ま	り	高
と	上	か	る	こ	と
夜	上	り	も	朝	の
正	午	を	ち	ょう	と
ろ	う	な	高	さ	の
気	温	と	天	気	は
し	も	分	か	つ	た
高	に	な	っ	て	い
う	こ	と	も	分	か

資料11 4年生のふりかえりノート

② 3・4年 社会科 単元名「わたしの住むまち どんなまち」

3年生が調べてきた金沢市の様子について、4年生がメモを取りながら、分かったことや考えたことを書きまとめる活動である。メモを取る時に、3年生が話すことをそのまま文章で書くのではなく、キーワードや矢印などを使って分かったことや考えたことを書くようにさせた。キーワード同士を矢印や直線で結ぶことで、3年生が伝えたかったことが理解できた。また、4年生は昨年度同じ学習をしているので、金沢市の様子についての思いや考えを重ね合わせながら聞くこともできたため、3年生の発表に対する思いや考えを持ちやすかったのだろう。4年生が3年生に質問したり、詳しく説明を求めたりする様子

も見られた(写真1)。また、4年生G児は見学に行った3年生の報告によって新しく近江



写真1 キーワードを使ったメモ

3年生との学習

私は3年生との学習はいいなと思います。なぜならば3年生が4年生でも知らないような金沢市の中央のことについて伝え、4年生は3年生にいい発表の仕方を見せる。たがいに教え合うという学習スタイルに学びがあったからです。私たち4年生は金沢市中央の見学には行けなかったので、近江町市場について分かりました。

資料12 4年生G児の学習後のふりかえり

(3) 活用知識の共有とかかわる相手の明確化

5年 図画工作科 題材名「あなたも感じて、わたしの感じ…」

5年生の学習「あなたも感じて、わたしの感じ…」に6年生を評価者としてかかわらせた。

5年生は、「私の感じ」が伝わるように活用知識を活かして風景スケッチに挑戦した。6年生

H児「6年生からのアドバイス」

図工の時間でやった「あたり」「タッチ」などの評価をしてもらいました。6年生はとても集中して評価を書いてくれて、「4分割ラインのこさをもう少しこうしたらいい」や、「遠近感をもっと少し出したらいい」など、具体的にアドバイスしてくれたので、これからはここをこうして気をつけよう…と思いました。

I児「図工で」

今日6年生にコラボで作品を見てもらった。私はIさんに見てもらった。Iさんは、アドバイスなどを具体的にしてくれたし、良いところも言ってくれた。たとえば、「家のえんとつの高さが同じになっているが、本当は違う」とか、「地面がもう少し細かめのほうがいい」とかだ。おかげで、私にはとてもプラスになった。それに、コメントを書く6年生の動きも参考にしたい。その動きというのは、手本と絵を見くらべたりすることだ。6年生からは、たくさんのことを学んだ。そういうのは、まねしていきたいと思った。

J児「ほんとだ」

ぼくには見えなかったところをてきかくに教えてくれました。ぼくらより一学年上の6年生が。今日、図工の時間「あなたも感じて 私の感じ」の勉強をして、作品を6年生に見てもらいました。自分ではわからない部分をやさしく正確に教えてくれました。ワークにアドバイスを書いてもらったのですが、手に持つ鉛筆は、とまることなく動きつづけていました。ぼくもそんな6年生になりたいです。

資料13 子どもの生活作文「あゆみ」に見られる異学年交流の効果

にも影響を受けていることを記している。

町市場について知ることができた。この4年生G児は昨年度金沢市の見学に行くことができなかつたため、3年生の発表によって金沢市の様子について思いや考え、疑問や質問をもつことが容易であったのだろう。また、4年生G児は、3年生と交流をして、自分が知らなかつた金沢市の近江町市場の様子についても学ぶことができた(資料12)。3年生との聞き合いを通して、昨年度の学習で足りなかつたことを知ることができた。さらに、キーワードや矢印を使ったメモを使って、子ども同士で思いや考えを伝えたことで、発表する技能も向上させることができた。4年生G児のふりかえりにもあるように、発表の仕方をお互いに教え合うことで、子どもは自分の思いや考えを効果的に伝えるために必要な声の大きさや相手が理解できる言葉の精選などについて考えることができた。

は、昨年度同じ題材のなかで獲得してきた活用知識を活かし、5年生のスケッチを評価しアドバイスを伝えた。ここでの活用知識は、鉛筆による描き方テクニックとしての「あたり」と「タッチ」の知識である。

評価活動の後、それぞれの立場での学びを意見交流した。5年生からは、「6年生のアドバイスは、より具体的でわかりやすかつた。」という発言が多く聞かれた。6年生からは、「教える立場になってみて、これまでの学びを活かした。」との感想があつた。下の学年の子どもは、上の学年の子どもに評価に活用知識がより具体的に活かされていることを学び、上の学年の子どもは、これまで習得してきた知識が実際に活かせるものだということを再認識したのである。5年生にとって6年生の評価の言葉が、いかに以降の実践の具体的なイメージに繋がるものであつたか、子どもの日記作文「あゆみ」の記述からも読み取ることができる(資料13)。さらに、5年生の子どもは、学習内容に加え、6年生の学ぶ姿勢

以上のことから、活用知識を共有し、かかわる相手を明確にすることは、聞き合いを促す異学年交流をデザインする上で重要なポイントとなると考える。

4 成果と課題

異学年交流を通して効果的な聞き合いを模索してきた。

一つ目のよさである「伝える技能を向上させること」は、(2)ノートやワークシートを活用したことで成果を見ることができた。伝える技能を向上させるには、伝える相手を意識し、相手が知りたいと思うことを伝える必要がある。社会の実践では、キーワードや矢印を使ったワークシートを使ったため、3年生の発表をなぞったような感想を4年生が伝えることは避けられた。ワークシートには主にキーワードしか書かれていないため、4年生はそのキーワードを手がかりに昨年度学習した時の思いや考えを入れながら、3年生に今の思いや考えを伝えることになる。そのため、伝える技能に向上が見られたのだと考える。また、ノートやワークシートをつかうことで、上の学年が下の学年とかかわりながら既習をふりかえることができた。3年生の発表を、文章ではなくキーワードや矢印をつかって、4年生が自分の思いや考えをワークシートに書くことができたので、聞き合いに積極性が出たのだと考える。3年生の発表を録音するような聞き方では、自分の思いや考えを持ちながら聞くことはできない。4年生がキーワードや矢印を使って3年生の発表を積極的に聞いたことで、昨年度学習した時にもった思いや考えをきっかけに、ものの見方や考え方を深めることができたのだろう。

しかし、課題は上の学年の子どもから一方的に思いや考えを伝えることに終始してしまい、下の学年の子どもからの思いや考えを伝えることにまで学習が発展していかなかった。このようなお互いのかかわりがなかったため、疑問点や問題点から新しい見方や考え方を見出すこともできなかった。今後は、下の学年の子どもがどのように自分の思いや考えを伝えるのか、場の設定の仕方も含めて考える必要がある。

二つ目のよさである「下の学年の子どもにとって、新しい知識を獲得したり、それらの知識がどう生かされるのかを学ぶ機会が得られたりすること」は、(1)下の学年を中心にした授業を展開したことと(3)活用知識の共有とかかわる相手の明確化で成果はあった。下の学年の子どもにとって、上の学年の子どもとのかかわりは、新しい見方や考え方を得るよい機会となっていた。天気の様子によって一日の気温の変化の仕方を考える学習において、天気の様子と一日の気温の変化を関連付けてとらえるには、記録温度計の観察記録を読めなければいけない。観察記録は折れ線グラフで書かれているため、折れ線グラフを読めなければ、天気の様子と一日の気温の変化をとらえることはできない。授業展開として、かかわりをもたせる相手を3年生と4年生に限定し、3年生の疑問や問題を4年生と共に解決できるようにした。すると、折れ線グラフの読み方といった活用できる知識を3年生は身に付けることで、天気の様子と一日の気温の変化の様子について新しい見方や考え方ができるようになっていった。一方、4年生も3年生と聞き合いをすることで、気温の変化の様子について新しい見方ができるようになり、理解を深めることができた。また、新しい見方ができるようになったために、新しい考え方が身に付いた。気温の変化の様子を「山の頂上」と表現したことで、「山の裾野」に視点に移り、最低気温や最高気温の時間帯に考えが向いたのである。新しい見方や考え方ができたために、新しい疑問や問題が生まれた。

三つ目のよさである「様々な視点で見方や考え方が交わされることが期待でき、新たな疑問や問題に気付くきっかけになること」は、(1)と(2)の手だてで成果はあった。異学年であるために、お互いの生活経験も学習経験も違う。この違いがお互いの差を生んでしまうのだが、この差がかかわり合う必要感を創り出していた。3年生にとっては、新しい知識を獲得することになるため、理解が不十分であったり、思い違いをしていたりすることもあった。そこで4年生と聞き合いをすることで、新たな疑問や問題を生んでいた。また、4年生とのかかわりは、3年生に新しい知識を手にした以上に、新しい見方や考え方を得られた点で成果だった。

一方で4年生は、3年生とのかかわりで既習をふり返られたことで、新しい見方や考え方を獲得した。そのために生まれた疑問や問題を解決しようと、さらにお互いに聞き合いが生まれた。上の学年の子どもにとって既習であることをもとにして、下の学年の子どもの新たな気付きに繋がるような活動を取り入れることが聞き合いにつながっていった。